

緒 言

日本塩業研究会 代表 落合 功

このたび、「日本塩業史研究文献目録（考古編）」「日本塩業史研究文献目録（考古編）遺跡一覧表」および「日本塩業史研究文献目録（焼塩壺編）」を合冊にして刊行することになりました。

文献目録は研究者にとって、当該テーマを始める作業（＝研究史の整理）の手引きとなります。また、研究者でなくとも、たとえば地元のことを知ろうとしたとき、この書を参照すれば、製塩業が行われていた場所を容易に知り得ることができるでしょう。製塩遺跡があるということは「そこで人々の営みが行われていた」ことを示す証です。同様に「焼塩壺」の研究は、中世から近世にかけての塩の生産と流通に関わる成果と言えるでしょう。

塩は生活必需品です。人類が生きていくためには塩が必要です。他のもので代替えることはできません。だからこそ人類は、何らかの方法で塩を得る努力をしてきたのです。

塩分を得ようとする方法は様々です。アイヌの人々は狩猟をして得られた動物から塩分を摂取していたと言われていています。日本国内にも山間部から塩を採取できますが、それは微量に過ぎません。四面が海に囲まれていた日本では、ほとんどが海水から採取していました。日本全国各地に塩浜があり、塩を採取しました。そして、貨幣が登場する前から流通や交換が行われていたのです。

人類が生まれてから現在に至るまで、塩は人々の営みに必要な物資であり、豊かさや経済活動の基本です。本文献目録を利用して、新たな成果が得られることを期待します。

日本塩業研究会では、本誌を「日本塩業研究刊行叢書 第1号」とし、今後資料集などの成果を発行していく予定です。是非、ご期待ください。

末筆ではありますが、「日本塩業史研究文献目録（考古編）」「日本塩業史研究文献目録（考古編）遺跡一覧表」および「日本塩業史研究文献目録（塩焼壺編）」は、全て岩本正二会員がとりまとめたものです。膨大な労力と時間を費やされましたこと、心より敬意を表したいと思います。

2021年8月